

へ 変革期には住民の取組が先行する

私が物心ついた頃のニュースには「公害」の二文字が多く見られた。水俣病、新潟水俣病、四日市ぜんそく、イタイイタイ病の日本の四大公害病だ。時期としては一九六〇年の前後だったと思う。まだ小学校の低学年で何がおきているのかを理解できる年ではなかったが、戦後復興の光の影で何か忌まわしいことがおきているということは何となく感じた。そして公害対策基本法ができたのは一九六七年だから、ずいぶん後になる。

大学時代は、歴史的環境や都市の水辺環境の保全を求める動きが全国いろいろな地域でおきていた。都市部では改造で失うものの重みに気づき、都市部への人口集中で過疎化する地方では今残されているものの可能性に気づく。歴史的町並みの保存にいち早く住民ぐるみで取り組んだのは妻籠宿だったと思う。現在にも引き継がれている「妻籠を愛する会」が立ち上がったのは一九六八年。私がおつとも深く関わった小樽運河の保存運動が声をあげたのが一九七三年だった。そして、歴史的町並みの保存のために伝統的建造物群保存地区の制度ができたのは一九七五年。

まちづくりを仕事としてから、何度大きな災害がこの国を襲ったことか。神戸に知り合いのプランナーがいて、いろいろ教えてもらうために伺ったことがある。美味しい神戸牛のステーキもご馳走になった。それから一ヶ月も経たない一九九五年、阪神淡路大震災は起きた。震災後に再訪した神戸は、倒壊したビルがまだ道を塞ぎ、ご馳走になった店も無かった。少しでもできることは無いかという思いでコンテナを使った仮説住宅づくりのプロジェクトのお手伝いなどをした。そのような気持ちで被災地を訪れた人の数は延べ百万人にもなげり、復興に向けた大きな力になった。そして、特定非営利活動促進法（NPO法）ができたのは、その三年後だった。

このように振り返ると、社会の価値観が大きく変わる時代の変革期はかなりの数ある。そして共通するのは、生活実感にもとづきこの意味を敏感に感じ取り、止むに止まれず行動に移すのはまず住民で、それを支える制度が整うのはあとになる。「変革期には住民の取組が先行する」ということだ。まちづくりプランナーは、そのように止むに止まれず行動に移す住民に寄り添って、少しでも力になって欲しいと思うのだ。